

校長会広報221号

発行・一般財団法人 宮崎県校長会館
編集・宮崎県校長会
広報委員会



美郷町の教育と18歳成人式

美郷町教育委員会 教育長 大坪 隆 昭

改正民法の施行により令和4年4月から成人年齢が18歳に引き下げられた。美郷町では合併前の旧3村時代から、地域の宝である子どもの成長を祝う成人式を自治体主催で実施してきた。その思いを継承する形で、令和4年8月15日に18歳、令和5年1月3日午前中に20歳、午後19歳を対象とした成人式を実施した。今後は、18歳を対象とした成人式を毎年8月に実施することとしている。

人口減少が進む本町においては、地域住民が現状を理解し一体となって対策を講じていくことが必要であり、このことは成長していく子どもたちにとっても重要な課題と言える。18歳での成人式を見据えた教育に取り組むことにした本町の学校教育とそこに至るまでの経緯を紹介しながら、これからの学校教育の在り方について考えてみたい。

1 美郷町における学校の統廃合

本町は平成18年に旧南郷村・旧西郷村・旧北郷村が合併して誕生したが、総人口は令和5年4月現在で6,874人から4,471人にまで減少している。この間、児童生徒数の減少や校舎耐震工事など、さまざまな観点で地域住民との協議を繰り返し、魅力ある学校づくりを推進することを目的として小中一貫教育に取り組むことになった。

南郷地区では、平成23年4月に4小学校と1中学校を統合し美郷南学園（南郷小・中学校）とし、北郷地区では、平成27年4月に2小学校と1中学校を統合し美郷北学園（北郷小・北郷中学校）とした。西郷地区では、令和3年4月に、1小学校と1中学校を統合し西郷義務教育学校とした。これで町内全ての学校が施設一体型になった。なお、美郷北学園は令和3年4月に義務教育学校へと学校種を変更し、美郷南学園でも令和6年4月から義務教育学校にする準備が進んでいる。また、3校とも施設内に町立幼稚園（年中・長児）

を併設しており、施設一体型の幼小中一貫教育学校になっている。

2 小中一貫教育学校と義務教育学校

義務教育学校は一貫教育学校の一つであるが、一貫教育学校では小学校と中学校の文化の違いからか、お互いに乗り越えることが難しい壁のようなものが感じられる。その点で義務教育学校では、初めから教職員が一つの組織体として学校運営に関わるため、校長の柔軟なアイデアと積極的な行動力やマネジメント力で多様な実践が可能になる。

例えば、豊富な教職員数を生かして乗り入れ授業や部活動等の複数担当制を実施している。これは教科担当制などを充実させるとともに、教職員のスキルアップや担当授業時数の平準化など教職員の働き方改革にもつながっている。また、生徒指導や特別支援教育では、幼年期からの連続性のある教育活動により早期発見・早期対応が可能である。さらに、11年間を通して我が子の成長を見届けることができる保護者にとっては、学校運営参画意識が高まり、PTA活動や学校運営協議会などへの関心が高まっている。

義務教育課程を修了した美郷の子どもたちは、町外の教育施設に通うことになる。そのことを強みととらえ、町外で得た多くの学び（経験）を故郷の活性化に生かせると素晴らしいと思う。本町の一貫教育が目指す15歳の姿は、「他者とのかわりの中で、互いを認め合う力を育むとともに、夢の実現を目指して行動できる15歳」としている。

義務教育課程を卒業して3年後、多種多様な経験を積んできた仲間と共に、お互いの成長を確かめ合い、一人の大人（主権者）として新たなスタートをきってほしいと願っている。



「内海ならではの」とは

宮崎市立内海小学校 岩切靖代

内海小に赴任して2か月が過ぎた。研修で自己紹介をする度に「伊勢海老が…」「台風で道路が…」と多くの方が話しかけてくださる。実にたくさん話題があるのだ。

そのとおりである。本校は内海港に隣接している。地域の方によると、コロナ禍以前、秋に“伊勢海老祭り”が行われ、ふるまい等もあったらしい。食べる話になると目が輝き、大いに盛り上がる。

台風14号の際の土砂崩れは国道220号線とJR日南線をふさぎ、内海地区にも大きな被害をもたらした。それでも、みんなで力と知恵を出し合い、復興していったと伺うことができた。

さて、前校長から引き継いだ学校経営ビジョンに繰り返し出てくるのが「内海ならではの教育」の文言。複式授業の進め方「内海スタイル」。全校児童と職員全員による「毎日全員あいさつ」。地域の学習材「アシタバ」を生かした活動。全校児童みんなで行う「釣り」。本当に数えきれない。

先日、全校児童19人で「磯遊び」に出掛けた。学校から歩いて10分足らずで海岸に到達する。石と砂が混じった海岸の端に、いわゆる“鬼の洗濯岩”。おっかなびっくりの私の横を、児童も学級担任もすーっと歩いていく。あっという間に思い思いの場所に広がり、潮だまりにいる小動物を見つけ、歓声を上げる。「見て、見て。かわいいカニがいた。」「石の下にいる、そこ。」普段は物静かな児童が大きな声で「あっ、魚がいた。」と大喜びしていた。みんなどっぷりと磯の楽しさを味わっている。

チャットGPTの話題が世の中を賑わせている。もしAIで読書感想文を書かれていたら、私には分からないかもしれない。デジタル化が進んですごい時代になったのだと思う。それでも、人と人が繋がるアナログの部分も忘れず大切にしたい。児童とともに「内海ならではの」を引き継ぎ、守り、育てていきたい。地域の方とともに歩み、地域から愛される学校づくりに取り組んでいきたい。

自分を支えた言葉

諸塚村立諸塚中学校 岡崎裕也

「管理職は1年勝負だ」

これは、自分が教頭時代、ある校長先生が言われていたものだ。

管理職は、今の職場に何年、何か月いられるか分からない。そう考えれば、安閑と過ごすことはできないし、したくない。「1年目だから様子を見ながら。」とか、「残りのキャリアはのんびりと。」などと考える管理職にはなりたくはない。せっかく、自分が思い描く学校経営ができるチャンスを与えてもらったのだから、数年しかない校長としてのキャリアの1年1年は大変重要である。これをいかに過ごすか、もっとオーバーに言えば、一度しかない人生、どう生きるか、という思いで過ごしてきた。前のめりでもいい、子どもたちにとって、先生方にとって大切だと思うことは、悔いを残さぬよう、実践していきたい。

その思いで、校長としての初年度の昨年、学校の制服をジェンダーフリー対応に変更した。地域、保

護者への周知・理解、外部との折衝はそれぞれに困難もあったが、何とか達成することができた。今年も、より大きなミッションを自分に課して実現に向けて取り組むつもりである。

「教育という財産」

苦労して私を育ててくれた母の口癖が、「あんたには教育しか残してやれんから。」だった。

その言葉と母の働く後ろ姿を見ながら、大きく脱線せず済んだ今日の自分があると思っている。「あんたが、教員として採用された時が一番嬉しかった。」と今でも母は言う。社会人となり、家庭を持ち、親となり、子どもの進学や就職に立ち会うという、それぞれの立場に立ったときに、当時の母の思い、悩み、苦しみが今になって理解できる気がする。

二人の娘は、今春から県内で教職員としての生活をスタートした。母から引き継いだ教育という財産は引き継がれ、私の親としてのゴールは近いかな、と思っている。

「春祭り」から見える地域の人々の気持ち

高千穂町立押方小学校 黒木 秀一

4月中旬、本校の校区内にある4つの各神社から春季例大祭への来賓案内が届いた。コロナ禍の影響で、御神幸まで実施するのは3年ぶりという。4月下旬の土日及び5月の祝日に、それぞれの大祭が重ならぬように計画されているようだ。

午前中は宮司による祝詞が唱えられ、玉串を供え、約1時間の式典が厳かに斎行される。昼は社務所で煮染めやおにぎりなどで腹ごしらえをし、それから御神幸が始まる。

まず、神社の入口から神輿まで、棒術・神楽を舞う白装束の大人たちに混じって、鮮やかな着物を着た長刀を舞う子どもたちが並ぶ。その間を御神体が運ばれ、神輿に移される。神楽太鼓の心地よい音が神社に鳴り響き、棒術と長刀の舞いが始まる。一通り舞い終わると、太鼓のリズムが変わり、長い行列が神輿を先導しながら別の神殿へと移動する。別の神殿でも神事後、神楽や棒術・長刀が舞われ、元の神社へと戻ってゆく。ある舞手の方から「春祭りは水神様への感謝、秋の夜神楽は五穀豊穡への感

謝」と教わった。

太鼓や篠笛、鐘の音と共に舞のかけ声が静かな山間に響き渡る。ゆっくりと悠久の時間が流れる。出店があるわけでもなく、また、観光客が見ているわけでもない。それでも、人々は神楽や棒術、長刀を舞い、神様への感謝を捧げる。

主要道路から神社へ向かう道は、どの地区でも道路の両脇の草が刈られ、落ち葉などもきれいに片付けてあった。およそ5kmにもわたってきれいに掃除してあった地区もあり、自然（神）に対する人々の感謝の気持ちが伝わってくる。

高齢化で祭りを続けるのも難しくなっていると感じる。そんな中、獅子舞や神輿に率先して参加する職員もいた。来年は見るだけでなく、自分も参加してみようと思う。腰を痛めない程度で・・・。



支 会 だ り

< 宮 崎 支 会 >

宮崎市立佐土原中学校 倉掛 高志

宮崎支会中学校長会は、宮崎市立中学校25校、国富町立中学校3校、綾町立中学校1校及び宮崎大学教育学部附属中学校1校、県立宮崎西高等学校附属中学校1校の3市町、計31校で構成されており、小・中学校別に活動している。例年、研修会を年7回、水曜日の午前中2時間半程度を基本に実施しており、県校長会理事会や各専門委員会からの報告・提案等の後、学校経営に関する情報交換や2つのブロック別に研究テーマを定めて調査・研究に取り組んでいる。

学校が抱える課題は多様化・複雑化しており、校長一人の力で最適解・納得解を見出すことは困難になってきている。課題解決に向けて、考えられるさまざまなケースを想定して、メリット、デメリットを整理して校内の組織で対応していきながらも、最終的な判断は、校長に全て委ねられており、「校長は孤独だ」という一面はあるのかもしれない。しかし、問題を抱え込まずに適切な判断をしていくためには、校長が孤独であってはいけないと思う。そし

て、判断の根拠をしっかりとするためには、自分や学校内だけでなく、相談できる人脈をつくり、多くの情報と参考意見を得ることが必要であると思う。その一つが、校長会の仲間である。宮崎支会は学校数が多く、また、校長としての経験年数も長い方が多いので、経験の豊かさを強みとしている。修学旅行の時期や行先の情報であったり、様々な悩みなど何でも相談をしたり、C4thでアンケートを行ったりして、横のつながりを大切にしながら学校経営上の様々な課題解決に取り組むことができるのでありがたい。

コロナ禍で昨年度まで中止していた歓迎会を、本年度は、小中合同で実施することができ、マスク着用も個人判断となってマスクなしの顔を拝見することも増え、明るいスタートとなった。必要な感染症対策に取り組みながら、工夫を凝らした教育活動の展開が期待される。



< 東白杵支会 >

門川町立五十鈴小学校 藤川 貴 司

東白杵支会は、門川町（小学校3校、中学校1校）、諸塚村（小学校2校、中学校1校）、椎葉村（小学校5校、中学校1校）、美郷町（小中一貫校1校、義務教育学校2校）の東白杵郡2町2村の小学校10校、中学校3校、小中一貫校1校（小学校籍）、義務教育学校2校（中学校籍）の計16校（小学校籍11名、中学校籍5名）で構成されている。また、海岸部から山間部までと広範囲に学校が点在し、その内、へき地校が11校、複式学級を有する学校が7校あり、小規模校が多い現状となっている。

どの地域も豊かな自然に恵まれ、自然素材や人材を生かした教育活動が展開されていること、神楽や臼太鼓等の伝統芸能が数多く受け継がれ教育活動にも生かされていること、地域と一体となった教育活動が展開されていること、地域住民の多大な協力体制が得られること等、教育を進める上での環境が整っていると見える。しかし、近年どの地域も高齢

化や過疎化が進んでいること、昨年の台風14号による甚大な被害を受けたこと等、課題もある。

これまで本支会では、年2回の役員会と年2回の総会・研修会を実施してきた。会を実施することで他町村の現状や情報収集ができる、顔を合わせることで校長同士のコミュニケーションが図られ様々な懸案に対する相談もしやすくなるなどのメリットがある。ただ、4町村にまたがるため行事等による日程調整が難しい、移動に時間がかかるなどのデメリットが指摘されている。そこで、本年度は、役員会2回（ハイブリット）、総会・研修会を参集型で年1回実施する予定である。

昨年度まではコロナ禍で、学校行事も制限され、地域との関わりも取りづらい状況にあった。本年度は、各学校の教育活動の解決に向け、各町各村はもちろん、支会内で情報を共有し、連携を密に取りながら、地域に愛される学校づくりに努めていきたい。

< 西白杵支会 >

日之影町立日之影小学校 隈元 辰 男

西白杵支会は、高千穂町（小学校4校、中学校1校、小中併設校1校）、日之影町（小学校3校、中学校1校）、五ヶ瀬町（小学校4校、中学校1校）の小学校11校、中学校4校（小中併設校は中学校籍）で構成されている。

本支会は、西白杵郡内3町の教育の充実と発展に期するために、校長会として組織的研究を推進し、校長の学校経営能力の向上を図ることを目的としている。また、努力目標は県校長会に準ずる形で、小学校では「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、中学校では「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」という研究主題のもと、組織的研究を推進していく計画である。

本年度は、15名のうち9名の校長が転出し、新規採用校長9名が着任した。また、本支会は準へ以

上のへき地校が13校あり、職員の異動も3町以外との交流が多い。そのため、各町の校長会はもちろんのこと、支会の校長会としても引継を丁寧に行う必要がある。特に、中学校においては、学校数が少ないことなどから3町で連携強化を図っているところである。

新型コロナウイルス感染症の感染状況が落ち着きを見せ、本年5月には5類感染症へ移行された。それに伴い、各学校では昨年度まで中止としていた活動を復活させている。しかし、4年前のことを知る職員が少ないことなどから、どのような手順で計画を進めていけば良いのか分からないという実態もあるようだ。そのような時のためにも各町校長会や西白杵支会校長会がつながりを強めておく必要があると考える。悩みを語り合ったり、情報を共有し合ったりしながら校長間の連携をさらに深め、各学校での望ましい学校経営を推進していきたい。

編集後記

令和5年度は、これまで3年余に及んだ新型コロナウイルス感染症対策について、一つの節目を迎えることとなりました。各学校では、児童生徒が安心して充実した学校生活を送ることができるよう、さまざまな教育活動に取り組んでこられたことでしょうか。

さて、ここに校長会広報紙221号をお届けいたします。美郷町教育委員会教育長の大坪 隆昭様には、御多用の中、特別に御寄稿いただきありがとうございました。また、宮崎・東白杵・西白杵支会の執筆者の皆様方、集約・校正に当たってくださった各支会の広報委員の皆様方にも感謝申し上げます。

本年度も、会員の情報発信・収集とつながりを深める広報紙づくりに取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

